

和田傳全集

第八卷

和田傳全集 第8卷

定價 2,800 円

昭和五十三年十月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

〒 162

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 法 人 家 の 光 協 会

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 | 4 7 2 4

製 本 印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第八卷

和田傳全集（第八卷）目次

鱒雲

5

風の道

183

解説

赤星虎次郎

装幀
舟橋菊男

題字
久住和代

鱒 雲

世間はひろいもので、和助の長男にも嫁が見つかったが、地面をひッペがしても見つかるまいと思われていたその嫁は、世間はまたせまいもので、ふしぎなこともあればあるものであったと言うのは、その嫁というのは、二十五年前に別れた和助の妻が、再婚した先で手がけた継娘だというのである。世話する人もはじめからそれと知っていたわけではないが、似たような家を探しあてたあげくのはてである。世話する人もはじめからそれと似たような家は探せばあるものだと言っても、かかわりなく偶然に落ちていたのではなかった。

農家ではあまり類がなく、長男は二十七にしてしまったが、きょうだい七人というだけでも今時誰も尻込みするのに、その七人が三ツ腹というのでは、地面をひッペがしても嫁などありっこないと思われた。均分相続は実際にはまだ行われなと言っても、その精神はようやく理解され、つまりそういうことになるものだと誰も心得るようになってきたから、きょうだいの少ないということがそれ自体財産も同じに思われ出している。

和助の妻のタネは三番目の後添いで、二番目の腹の次男の次に、この腹が三男をかしらに五人ヒシめき、下の四人はみな女である。こういうややこしい構成の員数がヤッサモッサやっているうえに、タネは長男の縁談で

もはじまるとすぐツノを出してムクれ、世話する人を寄せつけないときている。

もともと自作農の娘で初婚のタネが、三度目の後添いとして入ったのには、地主という格に惚れこんだうえに、はつきりと条件がつけてあったと言うのは、生まれる実子には一町歩の土地をつけて分家させるという約束だったのである。長子相続時代の大正末期のころだったから、農家の後妻というものはみなそのような条件をつけ、老後は実子にカカろうという設計をもって入ったのである。そう言えば二番目の妻も同じで、次男が生まれるとまだ眼もあかぬうちに、ソレ一町歩分けて子供名義に書き換えろと里方の親が迫って悶着となり、剛毅な和助の父親は和助に相談もなしに嫁はたたき出してしまったことだ。

タネの親はそのようなことも言わず、その約束は実際に分家を出すときに実行するということであつたのが、戦後の農地改革でそれはホゴとなり、和助はタネにはあたまのあがらぬ亭主になったが、しかし、すぐに子供名義に書き換えておいたとしても結果は同じだった筈で、農地改革だけは個人を認めず、家に対して行われ、そうしておいてからその家を解体し個人にかえたもののようにあつた。

分家を出すことも、実子にカカろうという老後の設計も潰え、タネが長男の嫁とりに積極的になれない肚を知つては、誰もうかつに世話などできるものではなかつたのである。

しかし、タネは陽気で楽天的なところもある女で、和助が遠慮しながらのように、やっとの思いでその嫁の継母にあたるのが、むかし彼の最初の妻だった人だという秘密をうちあけても、かくべついやな顔をするでもなく、

——ふーん、よッほどこの家がいいんだよ。今度は娘になりかわつてこの家にやつてきなさるんだね……。と、ケチもつけず、厭味でもなく、むしろおもしろそりに笑つて見せた。

——でも、無情なことはするもんじゃないねえ。いつかは仕返しされる。昔の人はエライことをやったよ。タネは今度は真顔になり、こもった言い方をしたが、そのいきさつは知っているからである。

その最初の妻とも、和助の意志で別れたのではない。麦俵がかつげないような嫁では一生の不作だと、大力で稼ぎ屋の父親が言い出し、秋になると、稲を刈らせて見、五畝も刈れぬような嫁では家にはおけぬと言いつ出した。和助は嫌いではなく、父親としてもそれは同じなようであったが、嫁は労力で計られ、和助にロクな相談もなく追い出してしまったのは、嫁は和助のものではなく、家のものであったからだ。

嫁は長男をおいて去ったが、何度も人を介して、子供をくれと哀願してきた。乳が張るといふその言い分にも父親は耳をかさず、子供はウチの孫だと言ってはねつけ、母親は搗り鉢で米の粉を搗った。和助は赤子を紐おぶいして、乳をもらいあるき、そんな姿で麦踏みなどしたが、それは取り返される恐さに逃げあっていたのでもあって、その妻とはそれなりの生き別れであった。

タネはそれほど詳しく知っているわけではないが、

——お笑い種さ。いまになればそれ見ると笑われても、一言もないねえ。ヒドイ仕返しだよ。

と、笑ったのは、二度目の妻を追い出したいきさつも知っていたからで、それとこれとゴツチャになり、土地とそれほど血マナコになってもいまはこのザマだと、農地改革のことを言ったのである。

——それでも、新家を一軒出してやっただけがめっけものだったねえ。……そいつはあたってたよ。

と、和助の弟に一町歩分けて分家を立てたことを言って、ホトケの悪口をおさめた。

その分家は、少し離れたところにあるが、そこはまた本家とは打って変わり、子供は一人しかなく、ヒシめきあう本家を尻目に、親子三人暮らして、稼いでは残している。

——でも、二十五年も、その人がそこにいるの、あんたは知らなかったのかね。三里かそこいらのところ……。

——二里が三里でも、縁のねえところだものな。……別れてしまえばアカの他人だ。

——二度目のヒトがすぐに来なすったからね。

その二度目のはタネの実家からそう遠くない村の人で、この方は離別後間もなくなくなったときいている。

——ふーん、じゃあ、おッ母さんとして二十五年ぶりにこの家のシキイを跨またがれることになるんだけど、この貧乏にやびっくりされるね、きつと。……それ見ろと……。

——そいつはおやじのせいでも、おれのせいでもねえさ。

農地改革のせいだと言わなくなったってわかっている。伝来の十町歩の田畑もいまはない。いまは泥足でヒシめきあいながら一町八反をコネまわしているガサだけは自作農だが、下からあがったのではなく、上から落ちたので、貧乏のしつづけである。容れるものもなくなってタモが巢を張っていても土蔵には固定資産税がかかり、ボロ着で泥足で住んでも家屋なりの資産税はかかると言った仕儀で、貧乏するのもあたりまえである。

——まあ、いっそアカの他人にこんな貧乏を覗かれるより、その方がいいさ、よかったようなんだよ。

と、タネが言うにも、奥歯にヒツかかった調子はなく、ズバリとあげすけで、和助は峠をひとつ越した思いでヤレヤレとするのである。

二

心のいどころが変わってきたのは、最初にそのタネであった。

縁談がまとまると、タネが急に分家へ足を運ぶことが繁くなったのは、婚礼の支度に泡を食ってあわて出したからだ、そればかりではない。心のいどころが違ってくる、ものごとが違つてき、急に分家がこれまでとは違つたものに見えてくるのである。

実子の三男の将来を案ずるのは、つまりは自分の老後をも考えるからだ、それが案じられてかなわない。この実子にせめて次男くらいの見どころがあればと思うのは、いまはしまったことではないが、これと言つた取り柄もなさそうで、嫁の新手が加わりでもしたら、テもなく田畑の畔に押し出されてしまうのではないかと案じられる。

次男は祖父に似たのか、デキがよかつたので商業学校へやり、いまは町の相互銀行に勤めている。むかしは無尽会社と馬鹿にされたのが相互銀行となり、世間からも銀行員と言われ、そのくせ日曜日には野良をやり、兄に負けず達者だから、畔に押し出されるどころではあるまい。

三男も農業学校へあげようかとタネが言い出したこともあつたが、和助が賛成しなかつたし、タネも一町歩と農業学校を天ビンにかけ、土地の方が確かだと思われた。土地は不動産で、これほど確かなものはなかつた。その確かな不動産が翌年には枯れ葉のように吹き飛ばされ、あわてて農業学校へあげようとしたが試験でハネられてしまつた。

しかし、この三男にたよるほかはない。タネは和助よりひと回りも若いのである。しかも陽気で大マカナタネは年よりずっと若いのに、和助は苦勞のしつづけからまだ五十を出たばかりなのにはや真ッ白に霜をかぶつてゐる。

実子に分ける約束の土地は吹ッ飛んでしまつたが、土地は分家にある——と、タネが心の深いところでこっそ

り考えはじめたのも、いまはじまったことではない、と言っても、それはかりを考えていたわけではない。しかし、いまは違ってきたのである。

土地は分家にある。その思いは、しかし、誰にも覗かせず深いところに隠し、タネは婚礼の支度でセッセと分家へ足を運び出した。苦勞性なくせに少し悠長な和助の尻をたたいて、ソレ羽織だ、ハカマだとさわぎ出しても、ふところの窮迫はお話にならない。地面をひッべがして嫁は見つけたと言うのに、支度ときたら何もできていず、あきれたはなしである。

——大次郎の間に合わせろ。ヤツは婚礼のとき着たきりで、それから一度だって手を通しちゃいねえから、新しモノも同じだ。

と、尻をたたかれて和助が言い出したのであった。大次郎とは分家した弟である。

羽織もハカマも大次郎の二十年前の間に合わすことにして、和助が自分でその交渉はしてきて、

——大もやすえも承知だからな、寸法合わせて縫い直してやれや。……なに、否も応もあるもんか。もともと、本家でこしらえてやった品物だ。

そういう言い種は和助の口ぐせだ。さアともすると本家でくれてやったものだと言うが、くれてやったのは和助ではない。先代がしたことだ。

そこでタネは分家へ行って品物を見ると、和助の言った通りで、大次郎は嫁とりのとき着たきりだったから、新しモノも同じにシャンとしていた。その後一度も手を通したことがないというのは、大次郎は甲種合格で軍隊にとられ、野砲でやられたのが原因で耳が遠くになったのが、結婚後はそれが急にひどくなって全く聴こえなくなってしまう、表立った場所には出なくなってしまうからである。

羽織も、ハカマも、簞笥の底でスルメのように堅くなっていたが、

——うちにはこんなものあったって仕方ないから、あげるよ。……うちには男はないし、本家は子沢山だし、あげるよ。

と、やすえは気前よく言った。やすえは気前がよく、テキパキ事を運ぶのは、世間へ出ない亭主の代わりをするためである。

——ううん、貸してもらえばいいんだよ。

——いいんだよ、あげるよ。……もともと本家から貰ったものなだからさ。うちには男ッ気はないし、本家へ返すよ。

タネはそれをきいてはッとした。和助の口ぐせには馴れているが、やすえの口からそのような言い種をきこうとは思いがけないことである。

タネは蓋ふたの隙間から中を覗かれた思いでうろたえながら、

——何かね、そんなことウチで言いでもしたの？

——でもないがさ、そんな肚もあるらしいようすだよ。

と、やすえは笑った。

あけッばなしで、口も軽いが、人の心を見抜くほどの知恵もあるとは思われぬこの義妹が感じたとすれば、和助はその肚をかなり露骨に見せたものにちがいない。タネは首をかしげる思いだったが、

——いやなことを言う人だね。ウチから貰ったんでもないじゃないか。くれた人はお墓の中だよ。……なあに、借りるだけでいいんだよ。

——でも縫い直さなきゃ駄目だろうからさ、あたしも手伝うよ。うちへ来なさいよ。うちで縫おうよ。気にもとめていないらしく、やすえは裁縫がニガ手のタネの手もとは承知しているようなことを言った。

——うん、この方がしずかでいいね。しずかで、ノンキで……。

——うちほどしずかな家はむらにはないさ。

——ノンキなのもむら中ないね。お金はたまるばかりだし……。

土間では藁屑に埋もれて大次郎が傍目わきめもふらず俵を編んでいる。

三

タネは分家へ裁縫に通い出したが、婚礼の席へ分家として坐るのはやすえだから、彼女にもその支度があつて、二人で無器用にそれをやり出した。

大次郎は土間で傍目もふらず藁仕事をしているだけだ。一人娘の浜子の学校の帰りはいつもおそく、タネがいるうち帰ってきたことがない。

縫い直しができあがる日まで、とうとう一度も浜子はタネがいるうち帰ったことがなかったが、その日タネがそのおそい帰りのことに触れると、

——大学へあがるッて言ってるんだよ。先生も勧めるし……。

と、やすえが言ったが、怕おそれてうかがう眼つきであった。

浜子はデキのいい子で、鳶が鷹を産んだみたいだと言う人もあるが、祖父にでも似たのだろうとタネも思っている。タネの子供らは一人も祖父になど似てくれぬのに、分家の一人娘にひょこりそれが出たのもあろう。

——一人ッ子だし、やってやれないことはないけど……。

ないけど何だと、タネの方もうかがう眼つきでやすえの肚を探ろうとしたが、それは言葉の綾に過ぎないよう
で、やすえはほんとうに大学へあげる気であるらしいと思われ、タネはうるたえた。

——大丈夫入れると先生も言われるし……。

タネは合わせる言葉もなく、心が煮えてくるのを抑えつけて黙っていると、

——でも、本家に悪いかしら、嫂ねえさん？

と、今度はやすえが覗いてきた。

そう出られて、悪いと言えるわけがないのに、悪くないともタネには言えない。

タネは心が煮えてくる。本家では娘を高校にもやれないでいる。女四人もつづいているんだからとは世間をつ
くろう口実で、負け惜しみでしかない。せめて長女だけでもと思ったことだが、それどころかと和助がきかなか
った。いいことに、その年はむらから誰も高校へはあがらなかったもので、それほど苦にもせずあきらめてしまっ
た。むらの娘たちは町の商店へ勤め出したが、うちあたりで店員には出せぬと見くだし、長女は野良を手伝わせ
ている。

——先生もトテモ熱心に勧められるし、あの子も行きたがってるんでよ、子供が二人あると思えばねえ……。

そうだとも、一人しかない子供だし、デキもいいんだからと、この場合なら誰もが言うにちがいない合わせ言
葉さえ、タネには言えないで、煮えくりかえる心で土間を見ると、大次郎が俵を編みながら、にッと、人なつッ
こい愛想笑いをして応えた。何も聴こえないから、誰にも同じなそんな愛想笑いで他意ないことを示すのである。

——この冬も千枚編むのかね？

——ああ、それくらいは編めるとも。

——大したもんだねえ……。

冬場には俵編みで二万円は稼ぐのである。むらや他人のことで暇ッかきひとつするでなし、傍目することも知らず、大次郎は人があそんでいる冬場だけでそんな呆れるほどの稼ぎをするうえに、その金を使う法もまるで知らないのだ。残るのもあたりまえで、大学へだって平気であげられるだろう。

——ほかに心配ってないんだけど……本家に悪いかしら、嫂さん？

——ウチが何て言うかしら……。

タネの声もかすれて、やっと出た。長女が泥だらけになって田をするそばを、浜子が大学生姿で通りかかる場面をタネは想像して、いてもたってもいられない。

本家として下に見くだしている浜子のそんな姿を、タネにはどうあってもゆるせないのである。

それはまだいい。たいへんなのは実はそんなことではないのである。土地は分家にあると、誰にも覗かせずひとりこっそりあたためている設計が、それではがらがらと崩れてしまうことになるのである。大学へあがって、浜子が高みに伸びて行きでもしたらどうなるというのだ。三男の順三とますます釣り合いがとれなくなる。順三になど眼もくれなくなりでもしたらどうなるというのだ。……これはとんでもないことになる。

学歴も特技もなく、ウデも度胸もなく、分家させる力も家にないとあれば、婿にくれでもするしかない。婿の口はいまは滅多にはないが、ある場合だってあると言っても、それでは、本人はいいとしてタネの老後の行きどころがない。だからそういうことは考えてもみなかった。しかし、分家となると話は別だ。そこに土地があり、娘がある。そこへなら順三は、かたちは婿にくれるのでも、末は分家を出してやったも同じなことになるはずで